

高尾山山頂から発信！

のぶすま



vol. 54 季刊
2019年冬号

富士山と高尾山

十三州大見晴展望台から眺める
富士山の存在感。
高尾山山頂にいる私たちにとって
なくてはならない存在です！



高尾山と富士山の間には歴史的に深い関わりがあります。
富士山登山は、※・修験の道とされてきましたが、奈良～平安時代にかけて、一般人でありながら富士を目指す者が現れました。
江戸時代には爆発的に富士詣が流行となり、多くの人々が先達（今でいうガイド）と一緒に富士山を目指しました。
（※・山岳信仰が取り入れられた日本独特の宗教や修業）

高尾山と修験道のゆかりの場所

その1「神変堂」

修験道の開祖とされている神変大菩薩（またの名をえんのおづぬ役小角）の御本尊が安置されていて、足腰心身の無事をお祈りする場所です。



その2「富士浅間社」

450年前に北条氏康によって建立されました。富士山まで行けない者は、先達に思いを託し、高尾山の富士浅間社にて富士を拝みました。詣でれば同じ効果を得られると多くの方が参拝するようになりました。現在でも富士登拝徒歩連行が夏と秋に2回行われていて、一般の方も参加できます。昔、江戸から富士山へ行くには、高尾山を通っていたようで、その名残を現在も見ることができます。



Twitterでふりかえる 高尾山ニュース！

2018年の4月より、Twitter・Facebookをはじめました！
山頂の気温や天気、旬な自然情報などを毎日発信しています。
では、10月～12月の間にあがったツイートの中から、注目のニュースをご紹介します。

本日のダイヤモンド富士（12/20）



ビジターセンター調べでは、この日が今年のベストダイヤモンド富士！
以下、今年の勝率です。↓
12/18○、19○、20◎、21×、22×（冬至）、23△

解説員 くらむ vol.16

虫は好き？

突然ですがみなさん、虫（昆虫）は好きですか？
実は私、ちよっと苦手でした。でもそれは大人になってからの話。記憶を幼少期まで遡ると、身近にいたチョウやバッタなど、虫を追いかけた日々が思い出されます。一体いつの間に虫が苦手な大人になってしまったのか…本人も首をかしげる始末です。

中でも夜間遭遇することの多い蛾の存在は、苦手を飛び越えもはや恐怖の存在に。そんな私にも日本の昆虫の三大生息地とも言われるここ高尾山にやってきて少しづつ変化が訪れます。そのきっかけのひとつにオオミズアオという大型の蛾との出会いがありました。このとき、昼間であったことも功を奏したのか、動きを鈍くしていたこの蛾を指先に止まらせることに成功！間近に観察した先にはターコイズグリーン美しい翅の色はもちろん、もふもふしたテディベアのような可愛らしい顔を見発したのです。

以降も日々、様々な虫たちとの出会いは繰り返され、私の中にあつた苦手意識はそれを上回る好奇心と発見とで書き消されていきます。

その大きな手助けとなっているのが、昆虫愛溢れる仲間の存在かもしれません。触れても危険はないか？捕まえ方や持ち方は？など、その場でレクチャーを受けることもしばしばです。未だ、動きの速い虫との遭遇には飛び上がることもありますが、相手を知ること「苦手」が「好き」へと変化していく体験は、なかなか素敵なことのように思えます。次の夏には「元氣なセミを素手で捕まえる！」ことが密かな目標です。

＜解説員 うい＞

たかおさん

「近未来の富士詣」の巻



作：むらかみ/絵：うめだ

「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて準備しております。ご希望の方はビジターセンター窓口までお越し下さい。



高尾山内で「富士」と名のつく場所

～薬王院の記録より～

一丁平の手前の「富士見台」と呼ばれる小さな頂には、昔、ご神体の富士山が絵のように拝めた。また奥の院と山頂を結ぶ道は富士講の道者の一行が賑やかに行き交っていた道という。いつしか「富士道」と呼ばれるようになった。



江戸から富士山へは高尾山を通して行っていったね

昔から続く奇跡！高尾山から見るダイヤモンド富士

高尾山と富士山と太陽が冬至に一直線上に重なる奇跡は、薬王院の建立にも関係していたのではないかとされています。天文学的な奇跡は今も昔も人々を惹きつけてやまず、毎年何百人もの人が見に訪れます。

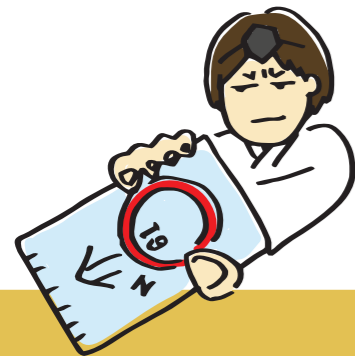
毎年、冬至を含む5日間ほどがチャンス！
富士山と太陽と私が重なるキセキ…



昔も今もたくさんの人が眺める富士山！ 高尾山から富士山がよく見える月は1月（75%）

ビジターセンターでは開館日は毎朝、山頂から富士山が見えるか記録を取っています。

過去3年間で富士山が見えた月ごとの割合を出して比べてみました。2位12月（72%）、3位2月（63%）、最下位8月（13%）



【やってみた！ 富士山から高尾山をさがす】
富士山の久須志神社の山小屋あたりでコンパスを出し、61度の角度の方向で高尾山を探索！
…雲がかかって見られず。残念！

まとめ

富士山と高尾山、大きな魅力をもつ二つの山の関わりには、修験道の歴史やダイヤモンド富士など天文を交えたロマンがありました。昨年、いつも眺めてばかりの富士山に、久しぶりに登り、改めて裾野の広さ、溶岩の固さ、強風の厳しさを知り、富士山の威厳を肌で感じました。高尾山に戻ってまた富士山を眺めたら…親しみや安心や憧れが入り混じった気持ちがありました。（言い表せない…）

〈解説員 さとう（ま）〉



「富士までにおよぶ雲海～」 中西悟堂の歌碑建立の秘話

ビジターセンターのすぐ横にある中西悟堂の歌碑。この歌を選定するにあたり、もう一つの候補として挙がった歌には、今はとても珍しい鳥として知られるあの鳥が詠まれていた…？！

「富士までにおよぶ雲海ひらけつつ 大見晴らしの朝鳥のこゑ」高尾ビジターセンターの横の窪地に建つ歌碑に刻まれた、この歌をご存知でしょうか。この歌は、日本野鳥の会の設立者として知られ、自然観察や自然保護の思想の育成にご尽力なされた中西悟堂先生の歌です。歌中の「大見晴らし」とは、ビジターセンターを出てすぐ右手にある展望台（大見晴台）のことであり、まさにこの場所で詠まれた歌だということとがわかります。当時、悟堂先生は高尾山のどんな姿を見て、この歌をよまれたのでしょうか。この歌が詠まれたのは、昭和46年（1971）八王子観光協会（現：八王子コンベンション協会）主催の「野鳥の声をきく会」のことだったそうです。悟堂先生と交流のあった八王子自然友の会副会長菱山忠三郎先生が、当時のことを「多摩のあゆみ（第77号）」で語られていました。2日間に渡って開催された会では前夜薬王院に宿泊され、夜の懇談は話が弾み夜中の2時まで続いたようです。「夢うつつの中、4時に起こされ探鳥に出かけた」とありました。そして、空も明るくなりかけた6時ごろ、山頂の大見晴台で目にした光景が「富士まで」の歌を生んだのです。その時の光景を悟堂先生と共に目にした菱山先生は、「その時の雲海の素晴らしさはまさに天下一品だった。あれからも幾度となく高尾山には登るが、この時ほどの見事な雲海に出会えたことはない」と語られています。

そして、さらにこんな驚きの事実が書かれていました。なんと、菱山先生はこの時の光景を写真に納め、その写真が山本秀順貫主を伝い、ビジターセンターの受付の上側に飾られていたというのです。「え！今もどこかに!？」と花火のように舞い上がった気持ちは、「その後センターの落雷により火災で建物とも灰になってしまった」という事実を受け、一瞬で鎮火されたのですが、なんと驚きの事実でありました。そして、その翌年の昭和47年に山本貫主のご依頼により悟堂先生の歌碑を山に建てることになりました。この時、悟堂先生の示されたもう一つの歌が「赤せうびん声ふるはせて鳴くときに み寺の山にきりたちわたる」でした。今となっては滅多に声を聞くことができなくなってしまうアカシヨウビンをはじめ、当時は、ヨタカ、ブツボウソウの声もよく聞こえていたそうです。高尾山の自然環境はもとより、ビジターセンターの建物や関わる人々など、時の流れと共に様々なことが変わってきています。時折耳にする「昔の高尾は良かった」という声も、当時を知らない私にとっては、羨ましさ混じりの複雑な感情を沸き起こさせます。しかし、悟堂先生の石碑や、ビジターセンターは今も存在します。そして、その確かな「つながり」は、平成生まれの私にとって過去を知り、未来について考える大切な手がかりとなっています。

〈解説員 うめだ〉

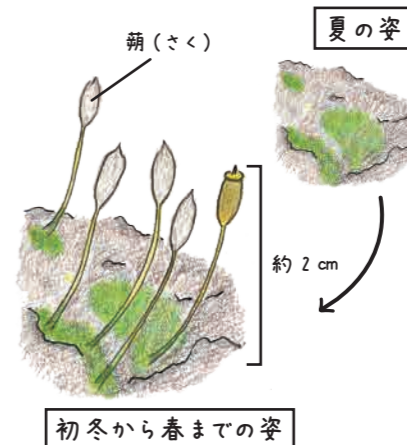
解説員の



vol.12

ハミズゴケ

気が付けば、確かに君はそこにいる



ハミズゴケは、コケ特有の特徴的な葉や茎がありません。そのため、土を染める緑色のシミにしか見え、コケだと気づく人は少ないです。しかし、胞子を飛ばす蒴（さく）は他のコケよりも大きく、蒴ができ始める初冬になると「あ！そこにいたんだね」とその存在に気づかされます。ちよつとうれしい出会いです。

見られる時期…一年中
蒴（さく）が見られる時期…9～3月
見られる場所…5号路南側など、日当たりのよい場所

〈解説員 さとう（た）〉